

あの日からもう6年 福島の実状を知る学習会

学習会主催の市民の会実行委員会に、私たち富士見市民ネットワークも参加しました。プログラムは、二部構成で2人の講演と質問に応じたディスカッションでした。

1. 「子どもの甲状腺がんの実態」
FoEJapan 代表理事 満田夏花氏
2. 「避難者支援の現状と課題」
避難の協働センター事務局長 瀬戸大作氏

講演1では、まず FoEJapan の活動方針として原発事故被害の可視化、エネルギー政策の転換「環境に負荷を与えない」を目指していると紹介があった。

主な活動内容は①子どもの放射線の年間許容量を20ミリシーベルトより厳しい数値にすること②自主避難者への一部賠償③県内外原発避難者の保養活動への支援（福島ほかほかプロジェクト）

2012年「原発事故子ども・被災者支援法を国は制定した。この中では一人一人丁寧な検査の重要性、居住の自由、生活再建の保障など定めている。

現在、甲状腺癌の疑いのある子どもは191人、手術後確定者は152人。検査希望者に応じられていない。チェルノブイリに見られるように発症時期は定まらず、生涯にわたる検査・治療が必要である。

講演2では国からの住宅支援が今年3月で打ち切られた後、自主避難者が追い込まれた実態について。主に自主避難母子世帯の生活が追い詰めら

れた状況、居場所がない、相談相手がいない貧困状況にある。「避難の協働センター」で相談会をやっているが、国・自治体でも実態把握ができていない中、本人の申し出で生活困難・自立支援から繋がる場合がある。自主避難者への風当たりが厳しく、個人情報に壁に阻まれている。

ディスカッションで明らかになったが、避難母子世帯の多くが貧困状況で、自殺、疾病者も多く国に正確な実態把握と支援が求められる。2020年までに除染の見通しのない所に帰宅させることをめざすのではなく、安心して生活できるように支援をする必要がある。

避難している方々は、原発事故で着のみ着のまま故郷を追われ生業、人間関係、家族もバラバラにされ、故郷に帰るに帰れない状況に追い込まれた。

講演後のディスカッション



富士見市民ネットワーク 通信

住みよいまちづくりを わたしたちの手で!

発行 富士見市民ネットワーク

〒354-0017 富士見市針ヶ谷1-26-18 加藤方
電話 049-251-8299

メール fujimi.c-net@jcom.home.ne.jp

住みよいまちづくりを考えよう

パート11

6年目の福島と富士見

酷暑が続いています。

7月末、九州北部は豪雨に襲われ、大きな被害もたらされました。被害に遭われた皆様に、心からお見舞い申し上げます。

6年前、多くの犠牲者を出した東日本大震災、未だ被災地は復興途上にあります。さらに世界最悪の東京電力福島原子力発電所の事故は、廃炉の見通しも立たず、増え続ける汚染水のタンク、低レベルの汚染土さえ処理場が見つからないまま、政府、電力会社は原発の再稼働を急いでいます。「東京オリンピックまであと3年」のかけ声が高まる中、被災地、中でも福島の実状は、忘れられていくかのようです。しかし、福島の今は決して他人事ではありません。

富士見市民ネットワークは、富士見市内の子どもたちが多く立ち入る公園を中心に放射能の空間線量を計りました（計測結果を右に掲載しました）。県内には放射線量の高いところもあり、今後も定期的に市内を計測していきたいと思っています。

再生可能なエネルギーで発電を進めるなど、より安心して安全な地域に、子どもたちの未来を託せるよう、施策が取られる必要があります。

●富士見市のホームページには6年前のデータから載っています。



富士見市内の放射線濃度の計測結果

放射能測定 富士見市内 2017年7/22~24					
測定場所	回数	5cm	50cm	1m	備考
東通公園	1	0.06	0.041	0.04	24日8時~9時 曇り
	2	0.055	0.051	0.039	
西原公園	1	0.054	0.047	0.048	
	2	0.064	0.05	0.039	
みどりの散歩道「関沢」	1	0.039	0.044	0.047	
	2	0.04	0.041	0.041	
唐沢公園	1	0.084	0.063	0.042	
	2	0.082	0.061	0.046	
松ノ木公園	1	0.037	0.036	0.04	
	2			0.046	
南畑小学校	1	0.063	0.048	0.056	24日午後2時 晴れ
	2	0.054	0.053	0.056	
鶴瀬西アルピス内公園	1		0.034		23日午後 曇り
	2		0.036		
	3		0.034		
貝戸の森	1		0.034		
	2		0.061		
	3		0.059		
鶴瀬西図書館分館 返却ポスト前	1		0.073		
	2		0.072		
第2運動公園	1	0.070	0.064	0.056	23日午前11時 小雨
	2	0.07	0.073	0.071	
	3	0.067	0.067	0.066	

富士見市民ネットワーク インフォメーション

◆おしゃべりタイム



9月20日(水) 13時30分~

10月25日(水) 10時~

場所: いずれも西交流センター集会室

内容: 井戸端会議

(ちょっぴりお菓子付)

参加お申込み・お問い合わせは
電話/049-255-4236

参加費無料
先着110名

イスラエルから来たユダヤ人家具職人
ダニー・ネフセタイさん(秩父在住)講演会
「国のために死ぬのはすばらしい？」
日時: 9月23日(土・祝) 10時30分~12時30分
場所: コピスみよし・ミニホール
主催: 生活クラブ 富士見・三芳支部
問い合わせ・申し込みは生活クラブ所沢センター
電話 049-259-5583

安心して暮らしやすいまちづくりのために、知恵を出し合い自ら考え行動する市民グループ、富士見市民ネットワークにあなたも参加しませんか。(年会費1500円)

富士見市民ネットワークは、このたび会員に呼びかけ、福島を忘れない！全国シンポジウム実行委員会主催の「福島を忘れない！シンポジウム」に5名が参加しました。

日程は 7月15・16日で、1日目は被災された地区の現場報告3箇所と講師白石草氏による講演「チェルノブイリと福島」でした。交流会では多くの方々がお話をしてくださいました。

2日目は現場視察。バスで福島駅から川俣町・飯舘村・南相馬市・浪江町・双葉町・大熊町・富岡町・樽葉町・広野・いわき市と回りました。途中5ヶ所に止まり、まだそのままの場所・復興をはじめている所を見てきました。以下参加された皆さんの感想を掲載します。

浪江町大平山から小学校を望む

あれから6年 福島を訪ねて

ふるさと

新幹線の車窓から眺める阿武隈山脈は昔と変わりがなく、青い稜線をなだらかに横たえていた。故郷が福島といいながら、震災の罹災地には今回が初めての見学会である。その山の裏側には、新聞報道以上の、私が想像もしなかった悲惨な現実が隠れていたのである。

被災から早くも6年、矢継ぎ早に避難解除が報じられる。アンダーコントロールの宣言と引き換えに誘致したオリンピックも、3年後に迫ってきた。建設の遅れが指摘されるなか、被災現地の労働力や重機・資材が東京に移動するのは目に見えていて、さらなる復興の遅れが懸念されるようになってきた。

現地にはシャッターが降りたまの店や、空き家のままの家が目立っている。なによりも、医療機関の空白が帰還を鈍らせているらしい。今も数万人が県内外で避難を続けている。「ふつうの暮らし」がままならない現実に、果たして何人が故郷に戻るのだろうか、未知数である。場合によっては、消滅する自治体も生まれるのではないだろうか。

原発は一度事故が起きれば、無数の人たちの人権を奪う凶器であることが歴然とした。にも関わらず、国や電力事業者は原発推進の方針を変える気はなさそうだ。オーストリアでは国民投票で原発の稼働が否決されたので、原発の建設を禁じる法律が制定された。

私達こそ、国の将来を判断する主権者である。この6年の現実を検証して、さらなる議論と運動を高める必要性を改めて認識させられた。

(H)



講師の白石氏

怒りが、涙が

2日目は早朝から現地見学だった。震災以来、現地に出かけボランティアに関わる機会が持てないだったのでいい機会と思い参加した。

福島市から飯舘村、浪江町（浪江町内はいまだ通行が解除されないところがあり南相馬市を迂回）葛尾村、国道6号線に沿って双葉町、大熊町、富岡町、楡葉町、広野町、いわき市まで各町村議員さんの説明を受けながら回った。



浪江町の最高値の線量



浪江町役場前の線量計

ふたたび

1年ぶりの福島は、全く変わらないところと急激な変貌を遂げているところと二分していた。

町村議員からの発言は、被災住民の気持へ配慮しない国・県・東電への諦めが滲んでいた。住民からは裁判の原告となり、あくまでも国、東電の責任を追求せずにはいられない思いが伝わった。またチェルノブイリの影響について医療機関、学校、家庭を調

査した現地報告を白石草さんがしてくれて、福島被災地との比較、方向性を示された。

被災時、請戸小学校の子どもたちが目指して逃げた大平山は、新たにコミュニティ広場になり、震災被災死者の墓所も設けられ穏やかな海が一望できる。残留放射線量の多少によって富岡町は復興が進み、川俣町、飯舘村、大熊町との格差が生じている。同じ被災自治体としての連携が難しく感じられた。

最後に福島駅前で、被災された福島の町村の皆さんが「私達を忘れないで、また来てください」と言ってくれました。

他所事ではなく、原発のある限りどこでも被災地になりうると改めて肝に銘じました。 (K)

第一印象は、周りは山ばかりだということ。国は放射線の除染を進め、避難区域解除の町村が出てきているが、本当に大丈夫だろうか。山は除染の対象外。線量、表面を削ぎ土を入れ替えた地表は低くても、地上1メートルは高い。ここに住む住民のことを考えて進めている政策なのだろうか疑問を持った。

6号線沿いには、放射線廃棄物が黒いビニール袋に入れられて5段に積み重ねられている。国が主導でやった地域では保存場所の田んぼの持ち主にお金が払われているという。ほかの田んぼは、草を刈り維持することに苦労している、が無料。長い間使われていない田んぼは、果たして田んぼとして復活できるのだろうかと不安を訴えていた。避難のあり様、子どもたちの健康診断などにも差別が見え、住民の分断が進んでいると感じた。

震災被害に加えてこれだけの放射能被害をだしながら、原子力発電所の再稼働が進められていることに怒りが湧いてきた。回った町村では、太陽光発電設備を屋根に取り付けている家庭が目についた。なぜ日本中で同じ方向を向けないのだろうか。(M)

福島を訪れて

地震と津波そして原子力発電所の事故による被害、埼玉に住んで、メディア経由の情報では知っているつもりだったが、実際に地元の声の聞き、被災地を訪問すると、迫ってくるものが全く違っていた。

津波に襲われ、全て流され、荒野に戻ったかのような被災地に呆然とした。一方、緑の多い日本のどこにもあるような一見平和に見える風景なのに、放射線量が高くて人が住めない地域の広さに胸が痛んだ。国道でも駐停車を禁止しなければならないほどの放射能が降っていたのだ。

昔、原発が今ほど多くない頃から電力会社や原発メーカー、学者は「原発は絶対安全だ、事故は起こらない、放射能は漏れない」とずっと言ってきた。原発に反対、懸念する市民・科学者側は、工学上絶対はあり得ない、「もしリスクゼロなら東京・新宿に原発を建設すれば良い」と攻めていたことを思い出す。

今回の訪問で、福島の被害者には今後長く支援が必要であること、原発は日本から無くさねばならないことを痛感した。 (H)